

『すべての民の救いのために』

聖書 ルカによる福音書2章1～20節 讃美歌 260 268 67 261 263 266

説教 森田幸男牧師

今日は、私たちが神様からこの新しい会堂を与えられて守る、最初のクリスマス礼拝であります。本当に嬉しい限りであります。

只今、西村善子姉が主の救いにあずかる洗礼を受けられました。週報に西村姉の生年月日が書いてあります。86歳になられます。傍で介助された西村隆さんは、そのご長男です。息子さんが先にこの教会で洗礼を受けられて、そしてお母さんが今日、この洗礼にあずかれたのであります。本当に嬉しいことです。

洗礼というのは、イエス・キリストと結ばれることであります。私たちは今年、いろいろな事を経験するなかで、イエス・キリストに結ばれていること、この事実こそ幸いそのものなのということ、身にしみて経験してまいりました。その洗礼を私たちキリスト者は神様から頂いている、その事を本当に感謝した日々でありました。

私たちは信仰によってイエス様に結ばれるわけですが、それに先立って、神の独り子イエス・キリストが、どのような時にもこの私と共にいてくださる。決して私たちを見離しはされない。見捨てたまわれない。これは永遠の事実であるということ、信じるのが、私たちのキリスト教の信仰なんです。その事実を認めて、受け入れて、ここに自分の永遠の身の置き所を見出したのです。そのように受け止めて、一人一人洗礼を受けたわけです。そのようなことでありますので、まだこの洗礼の恵みにあずかっておられない方も今日は多く出席されていますが、どうぞこの恵みに、幸いにあずかって頂きたいと思えます。

今日は、只今朗読されましたルカによる福音書2章1節～20節に記されているイエス・キリストの誕生の様子、その箇所を通して神様の示しを頂きたいと思えます。

ここにありますように、当時のローマの皇帝がアウグストゥスでありまして、ユダヤを含むその地方がシリア州と言われたのですが、その総督がキリニウスであったと記されています。このルカによる福音書の著者のルカは、色々なことを丹念に調べて、それを基礎にこの福音書を書いた人ですが、皇帝がアウグストゥスで、シリアの総督がキリニウスであった、その時のローマ帝国全領土にわたる住民登録がなされたのは、これは歴史の資料によって紀元前8年のことであったことが明らかになっております。今年はキリスト誕生2007年ということでもありますけれども、もう8年前ですと、今年は西暦、キリスト紀元2015年ということになります。紀元前8年にこのキリストの誕生があったと、こういうことになるわけであります。

そして、イエス・キリストの母マリアはヨセフと婚約中でありました。しかし、ヨセフのあずかり知らない内にマリアは身ごもったのであります。彼らはまだ二十歳になりません。マリアの場合は十六、七歳、ヨセフも少し上くらいでしょう。そういう若い二人がガリラヤのナザレからユダヤのベツレヘムまで、直線距離で百数十キロありますが、その距離を、聖書を素直に読むと、彼ら二人だけで、その本籍地のベツレヘムまで旅したように

見えるのであります。二人以外に同行者はいなかったように読めないでしょうか。二人はその本籍のあるベツレヘムに行ったのですから、家族、親類の人たちも、当然皆行ったはずであります。

この帝国全土にわたる住民登録、国勢調査は、当時14年毎に行われたということであり、これはもう例外を認めないのです。税金のため、徴兵のためというのが、その主たる目的でした。ユダヤ人は徴兵義務から免除されていましたから、税金取り立てのための住民登録ですね。そういうことですから、例外を認めない厳しい国勢調査であったと、これもそういうことを書いた記録が出土されているのです。

ですから、このヨセフとマリアだけではなくて、その親類等も皆行ったはずなんです。ところが、聖書を素直に読む限りでは、二人で行った。他に誰もいなかったというふうに読めるわけです。そしてベツレヘムに着いて、マリアは月が満ちて、そこで初子、イエス様を産みます。そして布でくるんで飼い葉桶に寝かせます。「宿屋には彼らの泊まる場所がなかったからだ」と記されております。ですから宿屋がいっぱいになるほど諸所方々から人々が自分たちの町、ベツレヘムに行ったのです。ローマ帝国全土にわたって行われたのですから、皆がそれぞれの町へ帰り、宿屋がもう満杯になる状況であった。ところが彼らには泊まる場所がなかったと、こう書いてあるのです。わたしは親類の者も行ったと思います。行ったけれども、仕方なく登録にはゆくけれども、ヨセフとマリア、あんな達とは私たちは関係を持ちたくない。何故なら、マリアはヨセフと婚約中なのに、ヨセフの知らない仕方で子供を宿したわけです。これはイスラエルの国では許されない事で、そういう事をした者は、村の者が集まって取り巻き、皆で石で打って、そういう罪を犯した者を処刑するという厳しい習慣でした。ですので、本当にこの百数十キロの身重のマリアを連れてのヨセフの旅というのは、簡単に数行で書かれておりますけれども、これは本当に大変な、厳しい旅であった。

それでこれも当時の習慣ということですがけれども、一人の子が誕生しますと、その村、町がどんな貧しい人でも、必ず楽隊がお祝いの曲を奏し、歌い、その誕生を祝福したということです。そういう習慣であったと言われておりますけれども、まあこういう旅先の事でもあるし、そして宿屋に泊まることもできないで、正に馬小屋で、家畜の餌をやる飼い葉桶をベッドにイエス様は寝かされたと、こういうことでありました。ですから、誰からも祝福されないような形でイエス様はお生まれになったということでもあります。

こういう過酷な状態の中で、このヨセフとマリアを支えたものは一体何であったのか。それはヨセフにもマリアにも神が天使を遣わして、決してマリアが不倫をしたわけではない。また、マリアにそんな意思はなくても、ローマ兵が周辺にいるわけですから、そういう者に犯されることもあった。しかし、「聖霊によって、神様の御意志によって、マリアは身ごもったのだから、あなたは恐れなくてマリアと結婚しなさい」というお告げを、ヨセフは夢で天使から聞かされるわけです。マリアも、「あなたは神の御意思によって救い主・メシアを宿す」という知らせを御使いから聞かされたのです。

ですから、一人の理解者も得られないそういう状態の二人を支え、導いたのは、ただ天使の言葉だけだったのです。夢のお告げは天使の言葉、天使の言葉は神様がこのように告げなさいとおっしゃるので、天使の言葉は神様のお言葉です。その神様の御言葉だけがこの二人の支えであったのです。これは現実離れをしているように思われるかもしれ

ませんが、実際、他に助けはなかったのです。けれども、神の言葉が、この二人を、こういう状況で本当に支えたのです。これは私たちの場合においてもそうであります。

この事情を知らない人たちにとっては、この二人は若い夫婦なんですから、そしてベツレヘムに来ている人たちは皆同郷人なんです。私たちも「大阪出身です」というそれだけで親しさを感じますね。そうであれば、ベツレヘムでこの若い夫婦のためにどんなことをしてでも、譲ってあげて一部屋提供してやっていいではないですか。ところが完全に同郷人からも無視されて、イエス様はマリアから馬小屋でお生まれになったのであります。

私たちの誰もがこの若い二人と同一の経験をするわけではありません。しかし、彼らが陥った、完全に誰にも理解されないで、無視されるということは、私たちも時に経験します。ここで聖書が語っていることは、私たちの目で見えるところでは、惨めです。けれどもこれらの出来事の全ては神様の御意志によって起こり、行われている出来事なのだというのを、聖書は私たちに語っているのです。

私たちは今年、このルカによる福音書全体に盛られているメッセージを強く覚えました。今読んでいます右の頁に、“ザカリアの預言”があります。“ザカリアの賛歌”と言った方がいいと思いますが。ザカリアというのは、イエス様より六か月前に生まれた、遠縁に当たる「洗礼者・バプテスマのヨハネ」と後に言われる人の父親です。この「ザカリア」という名前には、「神は覚えてくださる」という意味があります。その「ザカリアの賛歌」があって、今日の話に続くわけですが、人々から完全に無視され、汚らわしい者のように扱われたその出来事も、実は、神が覚え、神がご覧になり、神が計画されて遂行しておられる出来事なんですということを、このルカによる福音書は私たちに語っているのです。

それが証拠に、誰もこのイエス様の誕生を祝して歌ってくれる人がいなかったのですが、8節以下を見ていきますと、羊飼いたちがエルサレムの郊外で羊の番をしていた。野宿して夜通し羊の番をした。これはきつい仕事ですね。ベツレヘムの郊外では、エルサレムの神殿で献げられる羊を養牧する場所があったと言われています。これも確かな事として言われています。だから、ただの羊飼いではない。エルサレムの神殿では人間の身代わりとして羊が、しかも傷のない羊が、毎日、犠牲として献げられている。それがエルサレムの神殿の儀式なのです。神殿で献げられる羊が、ベツレヘムの郊外で養われていた。それを羊飼いたちは野宿でその群れの番をしているわけです。しかも彼らはそういう奉仕の仕事をしているのに、仕事柄汚らわしい者のように看做されていたということであったのです。

その彼らに天使が現れ、そして語るのです。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシア・救い主である。あなたがたは、布にくるまって飼う葉桶の中に寝ている乳飲み子を見つけるであろう。これがあなたがたへのしるしである」と。

「すべての民の救い主、それが馬小屋の家畜の飼う葉桶に寝かされている。これがあなたがたへのしるしである。」ということですから。これは何とも貧弱なしるしであります。

しかし13節を見ますと、「すると、突然、この天使に天の大軍が加わり、神を賛美して言った。『いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ』」とあります。先週も申し上げたのですが、このルカによる福音書1章2章は、本当に讃美歌が溢れております。でもこの13節、14節にあるこの神賛美ぐらいスケールの大きい神賛美はどこにもなかったと思います。

先ほど、ユダヤでは子供が生まれたら、小さな村でも楽隊がその誕生を祝福して歌い、演奏したという習慣があったということでしたけれども、このヨセフとマリア、イエス様を祝福する者は誰もいなかったのです。ところが、天使と天の大軍が神を賛美し、この二人を、そしてイエス様を祝福したのです。この人々から無視された三人が御心に適う人たちののです。何故なら、彼らは一人の理解者も周りに持たないのに、ただ神の言葉だけを信じ、それに支えられ、勇気を持ってイエス様を産んだわけですね。

「神の御心に適う人」とはどんな人を言うのだろうか、長年わたしは考えて来たのですけれども、「神の御心に適う人」とは、「この地上にいかなる理解者もなく、いかなる助けもなく、完全に孤立無援、天にも地にも助けとなるものが見出せないという、そういう状態であっても、なお神を頼む人のことです。仮に、そういうふうになら無視されるのが、自分自身に責任があるとしても、そのような者をもなお神は覚えていてくださる。お見捨てになりたまわないのだという事を、本当に信じ、感謝する人。」それが「神の御心に適う人」だと、わたしは思います。

私たちは今年5月に「献堂記念コンサート」もしまして、その中で歌われた一曲、『我手の花』は、与謝野晶子の詩に、信時潔が作曲したものでした。信時潔というのは、「海行かば」の作曲者です。今から120年前の12月29日に、この中之島の大阪北教会で生まれた、この教会の初代牧師、吉岡弘毅牧師の三男で、今年誕生120年の年に当たります。

この大阪北教会ことが、東京、国分寺のケーブルテレビで今日も放映されています。前後編で2時間近い特別記念番組で、そのDVDをテレビ局から送ってもらいましたが、今日も後編が国分寺で放映されているのです。そこで、「我手の花」という曲も、この教会の映像も流れていますので、またの機会に皆さんにも見て頂こうと思います。

そういう作曲者も生まれ、その献堂記念コンサートでいろんな音楽も聞いたわけです。『口短調ミサ』のバッハも凄い。「」アヴェ・ヴェルム・コルプス』のモーツァルトも凄い。『メサイア』のヘンデルも凄い。世の中にはいろいろ凄い音楽家がいるわけですがけれども、このイエス様の誕生を祝して、天使と天の軍勢が歌ったこの讃美歌には、誰も足元にも及ばないと思います。作曲家ならば、この時のこの讃美歌はどんなだったろうかと思ひ巡らし、それを目指して、それに一步でも近づくようなものを作ろうと、そういう意欲が湧くはずですね。変なことを申しますが、実は、私はその時、天使達と一緒にこの賛歌を歌っていたような気持ちになっているのです。時代も隔たっています。天と地も隔たっています。しかし、この賛歌を歌ったこの軍勢の一番隅のところで、わたしも一緒に歌っていたような気が何となくするのです。何故ならば、この貧しさの極限の中にある者のために、神がかくも壮大に祝福されているのです。神がそのことを為さっているのです。その神にこのわたしも覚えられているのです。だから技術的には全く足りなくても、この天の軍勢の讃美の思いにはわたしも負けない。神がこの私を顧みてくださっているのですから、彼ら以上とは勿論言いませんけれども、彼らと同じように、私も、わたしの魂も、神様を賛美するのです。イエス様をほめたたえるのです。

もう封印して言うまいと思っていたのですが、九月十日に木内正子さん、私の年子の姉ですけれども、殺されました。あの事件の被害者であります。その死に様は、見た目にはそれこそ十字架から降ろされたイエス様と同じような惨めな姿でした。けれども、キリストに結ばれているのだ。神に覚えられているのだ。その姿は、どうして？と思うような状

態でしたけれども、キリストに合わされ、神に覚えられているということは、この世のどんな力も奪うことは出来ないのです。ですからわたしはあの時の葬儀でも感謝したのです。神様を賛美したのです。ですから私もこの大合唱の一角で讃美に加わっていたと、こう私が申し上げて、皆さんは嘘だとは思われないでしょう。信仰とは、誰の場合でも、深い淵から神様を讃美すること以外ではありません。

イエス様の誕生を巡っては、クリスマスが来る度に私は、「クリスマスおめでとう！」という気分よりも、“一体これは何だろうか？”“一体何が起こったのだろうか？”と、本当にもう一度、第一歩に戻って思い巡らすのが常なのです。今日の箇所も毎年のように皆さんと読んでいるわけなのですけれども、ここに一体いかなる福音があるのだろうか、本当に思い巡らし、悩み悩みして、いろんな雑用もこなしながら今日の日を迎えました。

そんな中で今二つのことだけを申し上げますが、昨日、国分寺に住んでいる僧籍にもある方から、クリスマスのプレゼントを沢山贈ってもらったのです。そして忙しいのでお礼の電話で、暫く話したのですが、「先生、忘年会みたいです」と言われて、電話で忘年会をしたのです。「いろんな事を考えれば考えるほど、神様の導きを覚えます」と私が言いますと、「御縁ですねー」と先方は言われます。そういうことも昨日ありました。

そして実は、この数日私はパソコンの前で、一つのメールを待っておりました。皆さんにはモンタナの第一長老教会からの手紙の英文と日本文を今日お配りいたしました。それへのお礼の手紙を一昨日送りました。これを郵便で送りますと、クリスマスにはとても間に合いませんので、この教会の創設者、アレキサンダー牧師の曾孫のジョアンナ・シェルトンさんの所にメールを送り、「これをプリントして教会に届けてください」とお願いしたのです。今朝8時36分にジョアンナ・シェルトンさんからメールが来ました。「確かにいただきました。先ず、教会の牧師さんに転送いたしました。私は教会の皆さんには明日のクリスマス礼拝の時に紹介します。皆、きっと喜ぶでしょう。私がお手紙によって本当に喜びが与えられたように、教会の人たちにも喜びを与えられるでしょう」という返信をいただきました。

ですから私たちが色々していることは、国分寺の方は野口さんと言いますが、野口さんにもその思いは届くのですね。モンタナのジョアンナさんと、そのポルソン第一長老教会の皆さんにも思いは届くのですね。夕張の町は今ちょっと火が消えていますけれども、夕張伝道所も今日のクリスマスには火が灯るはず。私は見ないでもそれを信じます。

そういうことで、私たちに与えられた、「御子をさえ、神にとってかけがえのない独り子のイエス・キリストをさえ賜うこの恵み」というのは、これはそう簡単に信じられません。ですから聖書を読んでも、“分らない。これは何だろうか”と思うのは、これは正直なところだと思います。余りにも落差が大き過ぎるわけ。人から完全に無視されたこの人々を、神がこの宇宙大のスケールで祝福されるなんていうのは、この地上の悲惨さと天の大祝福、これとこれとを私たちは結び付けられないのです。しかし、これが結びつのが「信仰」なんです。私たちに与えられている信仰は、神の恵みの奇跡の賜物です。

そのような恵みが私たちに与えられております。ポルソン第一長老教会に送った手紙のコピーは今日皆様にもお配りしましたが、その一節に、わたしはこのように書きました。「私たちはみなさんからの手紙とプレゼントを通して、クリスマスの恵みを再確認いたしました。私たちは皆さまの御かげで、これまでに味わったことのないほど素晴らしいクリ

スマスを与えられました。また、神にはすべてが可能であり、神は我々のために何事をも為して下さる方であることを新たに知らされました。本当にありがとうございます。そしてまた私たちは、次の聖書の言葉が文字通り真実であることを心に刻みました。『神はその独り子をお与えになったほどに世を愛された（ヨハネ福音書 3 章 16 節）』『わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しみます死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜わらないはずがありませんか（ローマ 8 章 32 節）』。

人間は生きていれば苦しいことに遭遇します。もうどこにも助けがないというふうなところに、思いがけず落ち込むのです。普通の歴史、世界史、人生から見れば、悲惨のどん底なんです。けれども、そのことと神様の救いの歴史、「救済史」と言いますが、この世界史と救済史は本当に一つなんです。そのことは、エル・グレコの『三位一体』の絵で見ました。ですからこのみすばらしい飼葉桶、これがしるしなのです。それをこれ以上ない仕方、神は祝福しておられる。これは私たち一人一人の場合にも当てはまるのです。十字架こそ栄光なのです。キリストの十字架の死と復活の命に私たちは与るのです。

今ご紹介した野口さんは大阪出身の方です。プライバシーの侵害になりますが、大阪出身の人で、20 年前にお父さんの事業が倒産して、一家離散になって、行先を知らなくて、国分寺に住まわれることになったのだそうです。それから 20 年近くを経て、牧師である私にクリスマスプレゼントを贈ってくださいました。「神の導きですねー」「御縁ですねー」「電話で忘年会ですねー」と言い合って、野口さんは、この間も会った時にも言われたのですが、「離散以来、こんな喜ばしい時はありませんでした」と、言っておられました。その喜びの時を迎えるのに、20 年かかっているのです。でも、必ず喜びの時、感謝、讃美、歓喜の時は、私たち各自に訪れるのです。

私たちに対しても、神様はこの恵み、「決してわたしはあなたを見捨てない。」「わたしはあなたを祝福する。」「あなたに罪があるなら、それも赦す。そして永遠の祝福にあなたを入れる。」「あなたも我が子です。」そういうメッセージが今日の、この箇所にあるし、そのことを思い巡らし、噛みしめるのがクリスマスだと思うのです。

西村善子さんも人並みに 86 歳まで大変な人生を歩まれ、過ごして来られました。けれども今日、本当にキリストに結ばれるという、永遠の幸いを受けられたのです。その幸いを受けた私たち、まだそうでない方たちも、このクリスマスの恵みをご自分のものにしていただきたい。そのように心から願うものであります。

祈ります。

恵み深い主イエス・キリストの父なる神様。

自ら蒔いたものでないのに、しかしまた、自ら蒔いたことの故に、私たちは耐え難い苦しみに陥る者でありますけれども、あなたが私たちを忘れたまわず、覚えて、目を留めて、このような者の救いのために、平安のために、あなたがどんな事をも、どんな犠牲をも惜しまれないうで、私たちのために為さってくださいることを、この今年のクリスマスにおいて新たに覚えることができ、心から感謝いたします。いよいよこの尊い恵みを噛みしめて、私たちがそれぞれの場所で、感謝し、あなたの恵みを証することが出来ますように、また共にあずかっていくことができますようにしてください。

この祈り、主イエス・キリストの御名を通し御前にお捧げいたします。アーメン